



平成19年度の電子アーカイブ事業について

JSTでは平成17年度から、国内学協会が発行する学術雑誌の国際発信力の強化と知的資産の集積・保存を目的として、重要な学術雑誌を過去に遡って電子化する「電子アーカイブ事業」を行っております。平成17年度、18年度の電子アーカイブ対象誌として選定された139誌については、著作権等の問題がないものについて順次電子化を行い、J-STAGEのアーカイブサイト Journal@rchiveにて公開しています。

今年度は3月から5月にかけて実施した国内学協会の学術雑誌に関する基礎調査に寄せられた548誌分の回答を基に、新たに平成19年度電子アーカイブ対象の58誌を選定しました。当初の対象誌は国際発信を重視した英文誌が中心でしたが、その後は、日本の重要な学術成果の保存・公開という観点から、和文誌も含めて、創刊の古い雑誌や各分野の主要な雑誌も優先して選定しています。

今年度選定された新たな雑誌についても既選定誌の残されている部分と並行して電子化作業を行う予定ですので、多くの部分は来年度の公開となる見込みですが、電子化が完了した部分については順次登載・公開していく予定です。

また、来年度も引き続き電子アーカイブ対象誌を選定し、より多くの雑誌を電子化・公開していく予定です。

(Journal@rchiveサイト：<http://www.journalarchive.jst.go.jp/japanese/>)



論文の撤回や訂正についての推奨基準

学術雑誌の世界では、論文の捏造(ねつぞう)や剽窃(ひょうせつ)による論文の撤回など、社会問題ともなる事件が頻発しています。撤回までに至らなくても、論文の部分的訂正は頻繁に発生します。電子ジャーナルにおいて、撤回論文や訂正記事をどのように取り扱うかについては、最近ようやく国際的な慣行が成立してきました。

たとえば最近話題となった「ES細胞事件」では、Hwang教授がScienceやStem Cellsに投稿し、後に撤回された記事はThis article has been retractedとの注意書きが付いていますが、誰でも読むことができます。

(<http://www.sciencemag.org/cgi/content/full/303/5664/1669>,

<http://stemcells.alphamedpress.org/cgi/content/full/22/6/950>).

これは、このような捏造とみなされた論文も歴史的な記録として抹消してはいけないとの認識からです。冊子体の場合は一旦発行された論文は永久に残りますが、オンラインの場合は削除が可能です。削除されてしまえば、あとでその論文を検証しようとしてもできません。したがってたとえ撤回された論文であってもオンラインから削除しない、というのが国際的な合意となりました。また電子版の論文では、記述の一部に誤りがあった場合には容易に修正が可能です。しかし論文発行後にPDFを修正してしまうと、複数のPDFの版が出回ることになり、どれが正しいのかわかりません。また冊子体と異なる内容のPDFが出回ることにも問題があります。たとえばNatureでは、オンラインで出版された論文には誤りがあっても手を加えない(The online and print versions of the article are both part of the published record and hence their original published version is preserved.)、と明言しています。

RETRACTED 12 JANUARY 2006; SEE LAST PAGE

ological grouping of the genotypes throughout the epidemic (Fig. 2) (table S2).

In tracing the molecular evolution of SARS-CoV in China, we observed that the epidemic started and ended with deletion events, together with a progressive slowing of the nonsynonymous mutation rates and a common genotype that predominated during the latter part of the epidemic. The mechanistic explanation for the selective adaptation and purification processes that led to such genomic evolutionary changes in SARS-CoV requires further work (29). Nonetheless, this study has provided valuable clues to aid further investigations of this remarkable evolutionary tale.

We have sequenced the complete S gene (GenBank accession number AY272436) from an embryonated chick embryo (sampling date, 22 December 2003) collected from the most recent adult patient of the city of Guangzhou (most date, 16 December 2003). www.srsr.org.cn/sars/doc/presence/pc_27122003.asp; Phylogenetic analysis of the S gene sequence with those from the human SARS-CoV and palm civet SARS-like coronavirus indicated that this most recent case of SARS-like coronavirus is much closer to the palm civet SARS-like coronavirus than to any human SARS-CoV detected in the previous epidemic (Fig. S7 and table S4). Because it is evidently different from the recent laboratory infections in Singapore (www.srsr.org.cn/sars/2003_08_24/en) and Taiwan (www.srsr.org.cn/sars/2003/03/03), it strengthens the argument for animal origin of the human SARS epidemic.

References and Notes

1. S. C. Nicholls et al., *Nature* **415**, 418 (2002).
2. T. C. Kasari et al., *N. Engl. J. Med.* **346**, 1013 (2002).
3. C. Donat et al., *N. Engl. J. Med.* **346**, 1017 (2002).
4. P. A. Rice et al., *Science* **300**, 1369 (2002).
5. M. A. Marra et al., *Science* **300**, 1389 (2002).
6. G. Fung et al., *Science* **300**, 1392 (2002).
7. Y. J. Guan et al., *Lancet* **360**, 973 (2002).
8. J. M. Shu et al., *J. Infect. Dis.* **185**, 1011 (2002).
9. J. J. Li et al., *N. Engl. J. Med.* **346**, 1013 (2002).
10. J. J. Li et al., *N. Engl. J. Med.* **346**, 1017 (2002).
11. G. Fung et al., *Science* **300**, 1392 (2002).
12. S. C. Nicholls et al., *Nature* **415**, 418 (2002).
13. S. C. Nicholls et al., *Nature* **415**, 418 (2002).
14. S. C. Nicholls et al., *Nature* **415**, 418 (2002).
15. S. C. Nicholls et al., *Nature* **415**, 418 (2002).
16. S. C. Nicholls et al., *Nature* **415**, 418 (2002).
17. S. C. Nicholls et al., *Nature* **415**, 418 (2002).
18. S. C. Nicholls et al., *Nature* **415**, 418 (2002).
19. S. C. Nicholls et al., *Nature* **415**, 418 (2002).
20. S. C. Nicholls et al., *Nature* **415**, 418 (2002).
21. S. C. Nicholls et al., *Nature* **415**, 418 (2002).
22. S. C. Nicholls et al., *Nature* **415**, 418 (2002).
23. S. C. Nicholls et al., *Nature* **415**, 418 (2002).
24. S. C. Nicholls et al., *Nature* **415**, 418 (2002).
25. S. C. Nicholls et al., *Nature* **415**, 418 (2002).
26. S. C. Nicholls et al., *Nature* **415**, 418 (2002).
27. S. C. Nicholls et al., *Nature* **415**, 418 (2002).
28. S. C. Nicholls et al., *Nature* **415**, 418 (2002).
29. S. C. Nicholls et al., *Nature* **415**, 418 (2002).

REPORTS

Evidence of a Pluripotent Human Embryonic Stem Cell Line Derived from a Cloned Blastocyst

Woo Suk Hwang,^{1,2*} Young June Ryu,¹ Jong Hyuk Park,¹ Eun Soon Park,¹ Eu Gene Lee,¹ Ja Min Koo,¹ Hyun Yong Jeon,¹ Byoung Chan Lee,¹ Sung Ewan Kang,¹ Seon Jung Kim,¹ Curie Ahn,¹ Jung Hye Hwang,¹ Ky Young Park,¹ Joos B. Cibelli,³ Shin Yong Moon^{2*}

Somatic cell nuclear transfer (SCNT) technology has recently been used to generate animals with a common genetic composition. In this study, we report the derivation of a pluripotent embryonic stem (ES) cell line (SCNT-ES-1) from a cloned human blastocyst. The SCNT-ES-1 cells displayed typical ES cell morphology and cell surface markers and were capable of differentiating into embryoid bodies in vitro and of forming teratomas in vivo containing cell derivatives from all three embryonic germ layers in severe combined immunodeficient mice. After continuous proliferation for more than 70 passages, SCNT-ES-1 cells maintained normal karyotypes and were genetically identical to the somatic nuclear donor cells. Although we cannot completely exclude the possibility that the cells had a parthenogenetic origin, genotyping analysis support a SCNT origin of the derived human ES cells.

(http://www.nature.com/authors/editorial_policies/corrections.html)。誤りは訂正記事(エラータなど)によって訂正されます。

J-STAGEでは、これら国際的な慣行を踏まえ、「記事データの訂正・修正等について」の推奨基準をまとめました。近々J-STAGEについて(<http://info.jstage.jst.go.jp>)のページにて揭示予定です。主な内容は次のようになります。

- (1) 論文中の記載の部分的な誤り(著者名の綴りの誤りなども含む)は訂正記事(エラータなど)で訂正します。訂正記事は冊子体とオンラインの両方に、ページ数のあるページに掲載します。もとのPDFを修正することはありません。
- (2) 捏造、剽窃、その他重大な誤りにより論文を撤回する場合は、撤回告知記事を冊子体とオンラインに掲載します。元の記事には撤回したことを示すだけで削除はしません。
- (3) 容易に類推のつく軽微な誤り(所属機関名の綴りの誤り、明らかな単位の誤り)などについては訂正する必要はありません。

この推奨基準は規則ではありませんが、国際的に通用する学術雑誌を編集する上で準用していただきたい内容です。ご一読いただき、ご意見等ございましたらお寄せいただきたいと思います。

最近気がついたこと

◆オンラインのみのジャーナルが増えています

J-STAGEでは最近Cell Structure and Function誌、SOLA誌などオンラインのみで冊子体のないジャーナルの発行が続いています。そのようなお問い合わせも増えています。オンラインのみの場合、印刷費や郵送費が節約できることが大きなメリットです。どうしても冊子体が欲しいという学会員のためには後で累積版を印刷するという方法もあります。

◆自分の電子ジャーナル論文がGoogleなどから検索できることをご存じない学会員もいらっしゃいます

J-STAGEの電子ジャーナル論文についてはGoogleなどの検索エンジンや、Google Scholar, SciFinder, PubMedなどの文献検索サイトで検索され、検索結果から直接J-STAGEの該当論文がリンク閲覧されています。J-STAGEの論文閲覧回数でいえば、J-STAGEサイト内でのサーチからよりも、これらJ-STAGE外のサイト経由の方が上回っています。しかしながら、学会員の方の中には、J-STAGEに搭載されたご自分の論文がJ-STAGE以外のサイトからも検索・閲覧されていることをご存知ない方も多ようです。学会員の方にこのことをもっと知っていただければ、J-STAGE掲載誌への論文投稿も促進されると思われますので、学会におかれてもこの点をPRして頂けると良いのではないのでしょうか。(注:但し、リンクするには申請が必要です。またデータベースに収録がなければリンクできません。)

◆電子ジャーナル化の影響

既存の冊子体の雑誌を電子ジャーナル化する場合、公開により購読者・学会員が減少するのではないかと心配を持たれる学会があります。そのような心配のある学会の場合は閲覧を会員に限定することができます。一方そのように閲覧を制限すると、海外の読者を増やすことができず、引用数も増やせないというデメリットがあります。たとえば発行直後は閲覧を制限し、1年たったら無料公開という方法をとることもできます。公開方法について検討していらっしゃる学会はぜひご相談ください。

◆著作権や転載許可について聞かれるようになったこと

著者が自分の論文PDFを自分のホームページや機関リポジトリに載せて良いかどうか、という条件を明示する流れが欧米の学術出版社を中心にこの数年みられるようになってきました。日本でも各大学で機関リポジトリが構築されているため、J-STAGEにも時折、これに関連したお問い合わせをいただきます。

著作権は、特に投稿規定等に定めていなければ著者のもので、この場合著者は自由に自著作である論文を自分のホームページなどに掲載することができますが、著作権が学協会に帰属すると定めている場合は、掲載許可を学協会が出すこととなります。

この掲載について、著者ホームページや機関リポジトリなどへの掲載に限って、あらかじめ許可する条件(たとえば、仕上がりPDFの掲載を認めるか、それとも著者最終原稿のみ認めるかというバージョンに関する条件、あるいは論文発行後直ちに掲載を認めるか、それとも一定期間後かという掲載タイミングに関する条件、など)を投稿規定などに明示することで、著者や大学などからのお問い合わせを減らすことができます。また日本でも、学協会ごとのこのような著作権ポリシーをまとめたサイト(学協会著作権ポリシーデータベース; SCPJ)が作られています。まだ事例は少ないですが、リポジトリへの論文の登録を所属機関から要請されている研究者へのアピールにもなりますので、一度貴学会の著作権ポリシーをご検討されてはいかがでしょうか。

参考: SCPJ「著作権ポリシーとは」 <http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/scpj/>



第2回J-STAGEセミナーを開催しました。

J-STAGEでは、電子ジャーナルや学術情報発信に関するセミナーを不定期で開催しております。前回のインパクトファクターに関するセミナーに続き、7月5日にJSTホールにてCrossRefやOpenURLなど、電子ジャーナル間やデータベースとの連携を可能とするリンクの仕組みに関するセミナーを開催しました。講師にCrossRefのAmy Brand氏、サンメディアの松下茂氏をお迎えしました。Amy Brand氏にはCrossRefの提供するDOIリンクを始めとするサービスの利用状況や検索エンジンとの連携、引用文献記述解析や剽窃チェックといったCrossRefの取り組みの最新状況について興味深い内容をお話いただきました。松下氏にはOpenURLを利用したリンクの仕組みや、リンクリゾルバーの役割を解説していただきました。当日の発表資料はWebでも公開されております。



第2回J-STAGEセミナーの様相

トップページからJSTについてというリンクをたどったところにリンクがあります。ご参考にしていただければ幸いです。セミナーに参加された方へのアンケートでは役に立ったという回答が多く見られ、勉強になったという感想をいただきました。ただ、内容が難しかったという声もありました。今後のセミナーの企画案についても著作権関係に関するものや図書館に関するものなどいくつか回答が寄せられました。参考にさせていただき、皆様にお役に立つセミナーを今後も開催して参りたいと考えております。



新機能紹介

◆認証設定を確認するためのFreeアイコンを拡張しました

J-STAGEで公開されている資料は学協会の設定により、全文PDFや引用文献ページなどに閲覧時アクセス制限設定(認証設定)を行うことができます。

この度、機能拡張により、認証設定状況を以下の2種類のアイコンで区別できるようになりました。

1. Freeアイコン……………当該資料の全ての記事が認証なしで閲覧できます。
2. 一部Freeアイコン………当該一部の記事が認証なしで閲覧できます。

この拡張により、上記どちらのアイコンも表示されていない資料は全ての記事が認証設定されていることを表します。

また、併せて資料一覧左側に表示されているアイコンのヘルプ画面を追加しました。アイコンをクリックすると表示されます。本拡張に伴い、図書館向けジャーナル一覧ダウンロードデータの認証の欄がこれまでのFREE、空欄の他にPARTIALLY FREEが追加されます。閲覧の際の参考にしていただければ幸いです。

◆MathSciNetへのリンクを開始しました

リンク先拡大の一環として、J-STAGEおよびJournal@rchive上の記事の引用リンクや被引用リンクにMathSciNetへのリンクが追加されました。MathSciNetは米国数学会が運営する数学関連の文献データベースで、書誌・抄録情報のほか、Mathematical Reviewsに掲載されたレビューが提供されています。

J-STAGEからMathSciNetへのリンクは、MathSciNetに収録されている記事であれば自動的に付与されます(学会からのリンク申請は不要です)。過去の記事のリンク設定は数ヶ月かかる見込みです。もしリンクがまだない記事がありましたら、しばらくお待ちください。なお、MathSciNetからのリンクについては、CrossRef参加誌のみDOIリンクが一部張られていますが、今後もMathSciNetからJ-STAGEへのリンクを増やせるよう取り組んで参ります。

◆投稿審査システムのレポート出力が可能となりました

投稿審査システムのレポート出力については、これまで多くの学協会様から要望をいただいていた。要望内容も多岐にわたっていることから、これらの要望に対応するために開発を行いました。レポート機能では、管理している情報をダウンロードできるようにしました。ダウンロードしたデータはEXCEL等で取り込めるようにしていますので、利用学協会がダウンロードしたデータから必要な情報だけに絞り込みを行ってレポートとして編集していただくことができます。

今回提供したレポートの種類は、「月別審査作業集計表」、「審査中原稿集計表」、「審査原稿詳細表」です。

「月別審査作業集計表」は、月単位で号種別、原稿種別、審査分野毎に各審査作業の回数(初回投稿数、採択数等)を集計して出力します。ダウンロードできるデータの項目名は、ジャーナル毎にカスタマイズされたものに読み替えることにより把握できますので、利用しやすくなっています。

「審査中原稿集計表」は、レポート作成時点での初回投稿受付時から採否決定されるまでの審査中の原稿数を号種別、原稿種別、審査分野、担当編集委員ID毎に集計して出力します。採否決定後の原稿等、審査が終了したもの、取り消し済みの原稿は集計対象外としています。

「審査原稿詳細表」は、初回投稿日、採否結果、採否決定日および公開状況を集計条件として設定し、該当する原稿の詳細情報をレポートとして出力します。

これらのレポートは、CSV形式で出力していますので、EXCELなどで編集部が欲しい情報として、随時に簡単にレポート編集するなどして活用することができます。

J-STAGE登録誌数とアクセス状況

2007年7月末日時点で、J-STAGE登録資料は、634誌（ジャーナル409誌、予稿集・要旨集109誌、報告書8誌、JST報告書42誌、他66誌）でした。また、7月度は登録総論文数820,628記事に対して、アクセス数は次表のとおりでした。登録資料・記事も増加しており毎月アクセスが増加しています。

表1 7月度のアクセス数

	件数
全アクセス数	4,038,105
全PDFアクセス数	1,013,897
書誌情報アクセス数	1,104,341

表2 7月度の内外リンクサイトからの書誌情報アクセス数

リンクサイト	件数	リンクサイト	件数
CorssRef	33,698	Google	652,418
PubMed	187,403	J-STAGE	1,116
ChemPort	17,168	JOI	28,189
JDreamII	968	Journal@rchive	17

閲覧を多くする機能として、J-STAGEは国内外の電子ジャーナルサイト等との相互リンクを実現していることです。JSTリンクセンターがJ-STAGEと連携してCrossRefを介して世界の電子ジャーナルと引用文献により相互リンクしています。外部サイトからのアクセスとしてPubMedやGoogleからの検索結果による閲覧数が特筆されます。

Googleは約290誌で約65万件、PubMedは約70誌で約19万件と1誌あたりの件数として比較すると、GoogleからのアクセスはPubMedからのアクセスと大きな差が出ていない状況になっています。

図1と2は、平成18年度1年間のアクセスです。

図1から、書誌情報ページへのアクセスの75%はJSTリンクセンター経由からとなっています。ちなみに表1では、書誌情報のアクセスとPDFのアクセス数もほぼ近い値を示していますので、PDFについても各種検索サイトからの閲覧が多いことが窺えます。

図2から、アクセスの62%は海外からのもので、米国、中国、欧州からのアクセスが多く、約184カ国からアクセスされています。これらについてもJSTリンクセンターの機能が寄与しているものと思われます。

このような状況から、J-STAGEは今後もさらに多くの閲覧を実現するためにリンク先の拡大を図ります。

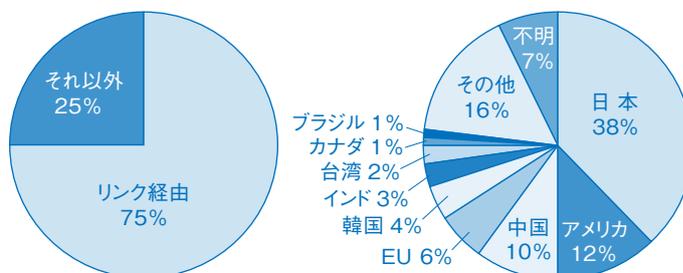


図1. 平成18年度の書誌情報アクセス比率

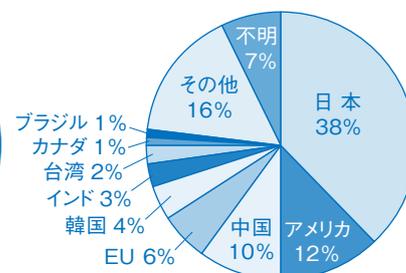


図2. 平成18年度のアクセス国内外比率

■ 編集後記 ■

♪7月より電子ジャーナル課に配属になりました。
普及啓発に邁進して参りますのでよろしくお願ひします。(お)
♪第4回情報プロフェッショナルシンポジウム(10/31・11/1開催)
で、J-STAGEからは2つ発表の予定です。場所は日本科学未来館。
お時間があれば是非聞きにいらしてください。(か)

★J-STAGEおよびJ-STAGEニュースに関するご意見・ご質問をお待ちしております。

JST 研究基盤情報部 電子ジャーナル課 (contact@jstage.jst.go.jp)